様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０３３４５

研究課題名（和文）パーソナリティ特性の多面的な適応過程の研究

研究課題名（英文）Study of multi-dimensional adaptation processes of personality traits

研究代表者
小塩　真司（Oshio, Atsushi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：６０３４３６５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：パーソナリティ特性は，時間や状況を超えて比較的安定した心理特性の総称である。個々人のパーソナリティはそれぞれが経験してきた内容によって大きく影響を受けると考えられる。しかし，その経験の中身については不明瞭な点も多い。本研究課題では，パーソナリティ特性と他の変数との間の関連が様々な状況の中でどのように変化していくかという調整効果を明らかにする。第1に，時間横断的メタ分析の手法を用いて，パーソナリティの時代変化が社会指標と関連することが示された。第2に，COVID-19感染拡大が生じる前と後において，パーソナリティ特性と年齢との関連が異なる可能性が示された。第3に，非認知能力について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年，パーソナリティ特性は非認知能力を構成する要素としても注目を集めている。非認知能力とは，測定可能であり，何らかの好ましい結果を予測し，可鍛性のある知能や学力以外の要素のことを指す。一部のパーソナリティ特性は社会において好ましい結果をもたらすことから，幼少期よりその特性を高める方向に教育するべきだという政策的な提言や実際の応用が試みられてもいる。しかしながら本研究の結果は，特定のパーソナリティ特性がどのような状況下においても常に好ましい・好ましくない結果につながるとは限らないことを示している。この結果は，固定的なパーソナリティの適応観を再考するきっかけとなることが期待される。

研究成果の概要（英文）：Personality traits are a general term for psychological characteristics that are relatively stable across time and circumstances. Each individual's personality is thought to be greatly influenced by the content of his or her individual experiences. However, the content of these experiences is often unclear. In this research project, we seek to clarify the moderation effects of how the associations between personality traits and other variables change across different situations. First, using a cross-sectional meta-analytic approach, we show that changes in personality over time are associated with social indicators. Second, we show that personality characteristics may be differently associated with age before and after the spread of COVID-19 infection. Third, non-cognitive abilities were discussed from the viewpoint of personality psychology.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：パーソナリティ　適応　環境　時代　年齢　非認知能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

パーソナリティ特性は，人間の内部に仮定され，一定の行動を予測する概念として設定される。パーソナリティ特性は直接観測困難な構成概念として設定されるものの，近年では多くの研究を基盤として日常生活の多様な行動との関連が検討されるようになっており，またパーソナリティ特性への介入の試みも多く見られるようになっている。

代表的なパーソナリティ特性群のひとつに，Big Five パーソナリティがある。これは，外向性，神経症傾向，開放性，協調性，勤勉性の 5 つの特性で人間のパーソナリティ全体をおおまかに捉えようとする枠組みである。この枠組みは心理辞書的研究から始まる歴史をもち，1980 年代以降にコンセンサスが得られるようになってきた。そしてこれまでに，これらのパーソナリティ特性は，多くの日常的な活動との関連が検討されてきた。これらの関連はメタ分析によって検討されたものも複数国の大規模調査で検討されたものも含まれており，ロバストな結果を示唆するものも多い。そしてこのような具体的な行動との関連は，Big Five パーソナリティ各次元の適応・不適応の程度を示唆するものである。

また近年，Big Five だけではなく，個別のパーソナリティ特性の適応・不適応も盛んに検討されてきている。たとえば自己愛，マキャベリアニズム，サイコパシーの複合体である Dark Triad は社会的に問題を生じさせる特性群として，遠い目標に向けて努力を重ねる Grit や精神的な回復につながるレジリエンスは社会的に望ましい結果をもたらす特性として，注目を集めている。

これらのパーソナリティ変数を現実社会に応用しようとする試みも進展している。たとえば，Grit を高めるという教育方針を掲げる学校も存在しており，就職活動場面ではサイコパシー的な特性の検出を目的に謳うテストも注目されている。また，知能や学力以外の社会的に望ましい心理学的特性は非認知能力（noncognitive skills）と呼ばれ，社会や教育のなかで高めることが推奨されている。この動きの背景には実際に，先に挙げたようにパーソナリティ特性が現実社会のなかでの望ましい（望ましくない）行動や結果に結びつくことが報告されてきたことがある。このような研究結果や提言が，パーソナリティ変数をさまざまな社会的場面で測定し，また介入によって諸変数を高めたり低めたりすることにつながっている。

実際の研究のなかで効果量を確認すると，これらのパーソナリティ特性とさまざまな適応的・不適応的な行動や結果との関連は決して大きなものではない。では，このような小さな効果量しか得られない現象については，常に介入の効果は期待できないのであろうか。ここで重要なことは，効果量の大きさが時と場合によって異なるという観点である。

そこで本研究では，生態学的な調整変数や時代による調整効果の検討を試みる。たとえば，パーソナリティの適応・不適応に及ぼす効果は居住地によって異なる可能性がある。また同じパーソナリティ特性であっても，いつの時代でも同じように適応的であるとは限らない。本研究では，これらの要因を考慮に入れた適応過程の検討を通じ，心理特性の望ましさについて考察する。

２．研究の目的

本研究では，生態学的環境や時代という，これまで個人の特性と適応過程を考慮する際にはあまり注目さてこなかった要因に焦点をあて，特定のパーソナリティ特性が適応・不適応に至る条件を探索する。このような検討を行うことで，単に「この心理特性を伸ばそう」とする一面的な考え方に警鐘を鳴らし，人々がよりよく生きる方策を探すことが可能となると考えられる。ただし本研究は，ある心理的な特性を伸ばしたり抑制したりする介入や教育そのものを問題視するわけではない。本研究で広範な状況や時代要因について詳細に検討することにより，個々人が置かれた状況により合致した，個々人をより良い状態へと導くような介入や教育方策に結びつく道筋を探る。この点は，本研究の独自の観点のひとつである。

３．研究の方法

本研究では比較的大規模なサンプルを分析すること，またメタ分析の手法を応用することで，時間と空間を調整変数として考慮するという試みを行う。たとえば，特定のパーソナリティと適応との関連を検討することを想定する。その関連の大きさやパターンは，時間と空間によって異なってくる。より具体的な例のひとつは，外向的なパーソナリティ特性と幸福感の関連パターンが，住んでいる地域と生きている時代によって変わってくる可能性である。

４．研究成果

(1) パーソナリティ特性と社会指標の関連

目的：時間横断的メタ分析（cross-temporal meta-analysis）は，心理学的な変数の時代変化

を検討するひとつの手法であり，調査年ごとに平均値等の統計値を統合する手法である。これまでにこの手法を用いて，自尊感情の平均値が日本において 1980 年代から 2010 年代にかけて低下してきたことが報告されている（小塩他, 2014）。また小塩他(2019)は，日本でよく使用されてきた心理検査のひとつである YG 性格検査の結果を収集し，各特性の平均値が 50 年以上の期間を経て曲線的に変化してきたことを示している。これらの検討は，時代とともにパーソナリティ特性のような心理特性の平均値に差が生じてくることを意味している。しかし，どのような社会指標がその変化に関連するのかは曖昧なままに残されている。

そこで，社会的な指標が YG 性格検査の各下位尺度の平均値と関連するかどうかを時系列分析によって検討する。第１に，社会指標の変動が先に生じるのか，パーソナリティの変動が先に生じるのかを推定する。第２に，社会指標の変動が生じて何年後にパーソナリティの平均値が変動するかを推定する。

方法：小塩他（2019）の時間横断的メタ分析で推定された文献のうち,大学生を調査対象とした部分を抽出した。分析に用いられた総論文数は 95 本中 74 本（77.9%），研究数（平均値の数）は 171（Ag）から 181（D）までであり，総サンプルサイズは 29,524 名（Ag）から 29,847 名（D）であった。YG 性格検査の平均値を予測し得る社会指標として，時間横断的メタ分析でパーソナリティ変数との関連が検討されてきた指標，OECD による指標，経済学において各国の幸福度決定要因として扱われている指標をもとに，わが国における人口動態や経済動向，精神的健康の状況などを全体的に反映すると考えられる社会指標を選択した。検討の結果，合計特殊出生率，死亡率，自殺率，婚姻率，離婚率，失業率，一人当たり GDP 成長率を用いた。

結果：まず，7 つの社会指標に対して主成分分析を行ったところ，第 1 主成分の説明率が 70.99%と高い値を示したため，年ごとの主成分得点を算出し，社会指標総合値とした。推定された主成分得点の高さは全体的な社会的状況の良好さを表していると考えられた。各調査年における YG 性格検査各特性の平均値と社会指標総合値との対応関係を検討するために，t-1 時点の YG 性格検査各得点を統制した，t 時点の YG 性格検査と t-1 時点の社会指標総合値との偏相関係数を算出した。社会指標総合値と YG 性格検査の攻撃性（Ag）および一般的活動性（G）とは有意な正の関連，劣等感（I），神経質（N），客観性の欠如（O）は有意な負の関連，そして協調性の欠如（Co），支配性（A）は|.20|以上の負の関連を示した。これらの結果は，YG 性格検査の中に，前の時点の社会的な指標と対応する側面が含まれることを示唆する。社会指標総合値と YG 性格検査 12 特性の平均値との時間的な前後関係を検討するために VAR モデルを用いた。分析に際しては社会指標総合値と 12 特性の平均値のいずれか 1 つを用いる 2 変量の VAR モデルを設定し，特性ごとに分析を行った。最大次数は 5 とし，AIC を基準としてモデル選択を行った。劣等感（I），神経質（N），客観性の欠如（O），攻撃性（Ag），一般的活動性（G）については，1 次のラグをもつモデルが選択された。劣等感（I），神経質（N），客観性の欠如（O）に対しては，1 年前の社会指標総合値が有意な負の関連を示し，攻撃性（Ag），一般的活動性（G）に対しては 1 年前の社会指標総合値が有意な正の関連を示した。のんきさ（R）については，5 次のラグをもつモデルが選択され，3 年前の社会指標総合値が有意な負の関連を示した。思考的外向（T）については，2 次のラグをもつモデルが選択され，2 年前の社会指標総合値が有意な正の関連を示した。

分析結果から，YG 性格検査の特性の中には１年前，２年前，３年前の社会指標が関連するものが見られることが明らかにされた。劣等感（I）,神経質（N）,客観性の欠如（O）については１年前の社会指標が負の関連，攻撃性（Ag）と一般的活動性（G）については１年前の社会指標が正の関連を示しており，思考的外向（T）やのんきさ（R）は２年から３年前の社会指標に関連していた。その一方で，YG 性格検査の平均値から社会指標に対する影響はいずれも有意ではなかった。これらの結果から，パーソナリティの変動は社会指標の変動が生じた後に生じており，社会的な変化がパーソナリティの平均値の変化に影響を及ぼす可能性が示唆される。

(2)新型コロナウィルス感染症（COVID-19）前後のパーソナリティ発達

目的：新型ウイルス SARS-CoV-2 が日本でも広く流行した。2021 年秋の段階で感染拡大に関しては 4 つの大きな生じており，約 8 万人が感染したとされる。中国での先行研究では，パンデミックの初期段階で 16.5%が抑うつ症状，28.8%が不安症状を訴えたことが報告されている（Wang et al., 2020）。十分な検討がなされているわけではないが，COVID-19 パンデミックの状況は，パーソナリティの形成に何らかの影響を与えた可能性があると考えられる。また，その影響は年齢層によって異なる可能性がある。COVID-19 の死亡率の違いから，高齢者は対人関係を避ける傾向があり，一方で若年者は自粛の要請をあまり気にしない傾向があるとも考えられ，このような年齢差もパーソナリティの様相に影響する可能性がある。これまでの研究では，日本でもビッグファイブ性格特性の平均値に年齢による有意差があることが報告されている。果たしてパンデミックの状況は，ビッグファイブ性格特性の年齢による平均差に何らかの影響を与えたと言えるのだろうか。そこで本研究では，日本における縦断的な大規模データセットを用いて，Big Five パーソナリティ特性の平均レベルの年齢差と，それに対する COVID-19 パンデミックの調整効果について検討する。

方法：株式会社 NTT データ経営研究所が実施したオンライン調査のデータセットを統合し，縦断的なデータセットを作成した。本研究ではデータセット FY18-02 と FY20 を統合した。こ

のデータセットでは，2018 年と 2020 年の秋にアンケートに回答した日本人成人（第 1 波の平均年齢は 51.4 歳，年齢幅は 16～90 歳）が 6918 人であった。Big Five のパーソナリティ特性を評価するために，Ten Item Personality Inventory の日本語版（小塩他, 2012）を使用した。また本研究では，社会経済的変数として年齢，性別，教育レベルが分析に用いられた。教育レベルは統制変数として使用した。

結果：Big Five の順位安定性（再検査信頼性）を検討するため，2018 年と 2020 年の調査間の相関係数を算出した。結果から，r = .66（協調性）から r = .76（外向性）の正の相関係数が得られた。すべての Big Five パーソナリティ特性について，十分な安定性が示された。調査時期を反復要因，年齢と性別を被験者間要因，教育レベルを統制変数とした分散分析を行ったところ（Figure 1），開放性のみ有意な時間と性別の交互作用があり，COVID-19 パンデミック時において男性よりも女性の方が，開放性得点が低下したことが示された。勤勉性については，時間と年齢の有意な交互作用がみられ，パンデミック期間中において高齢者よりも若年者の方が，平均点がより低くなったことが示された。時間の有意な主効果はすべての Big Five 特性で認められ，パンデミックは全体的な性格特性に負の影響を与えることが示された。また年齢と性別の有意な主効果は，すべてのビッグファイブの性格特性について認められた。これらの結果は，COVID-19 のパンデミック時においても，ビッグファイブ性格特性の平均レベルの年齢差が維持されていることを示唆している。

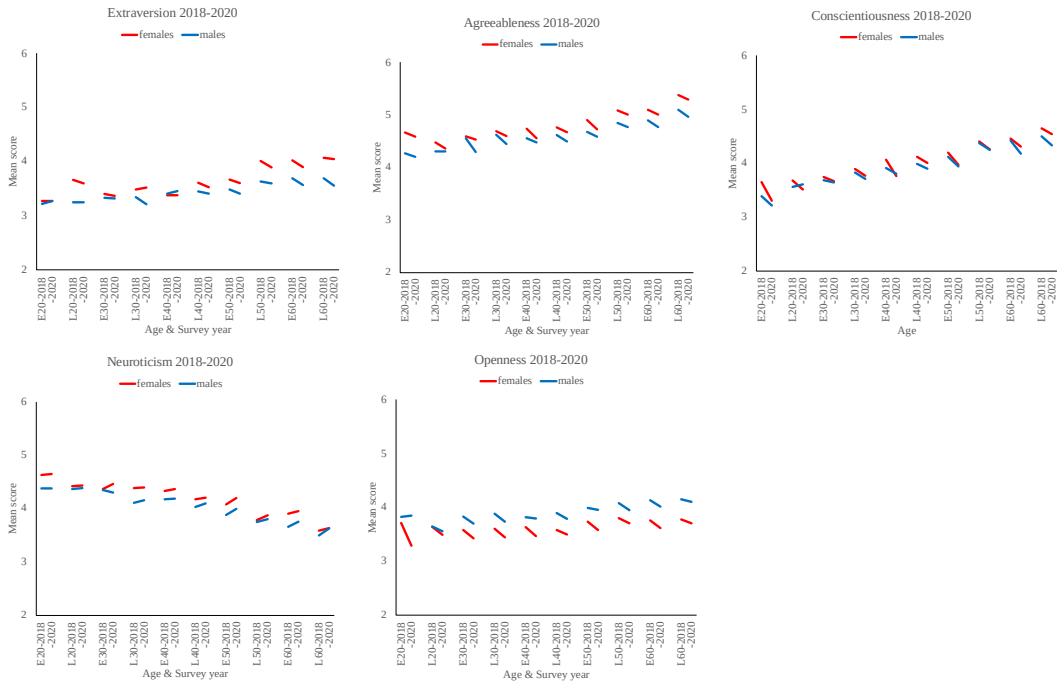

Figure 1　調査年，年齢，性別ごとに Big Five パーソナリティの平均値

パンデミックの状況は，日本の成人の性格特性においてネガティブ方向に影響を与えることが示唆された。そのネガティブな影響は，ほぼすべての年齢層と性別で生じており，パンデミック時にも性格特性の年齢差が維持されていた。本研究で見出された年齢差は，欧米の年齢差を検討した先行研究で報告された結果と同様である。本研究は，日本におけるパーソナリティ形成のさらなる知見を提供するものである。

(3)非認知能力に関する考察

近年，非認知能力という言葉を見聞きする機会が増加している。非認知能力への注目は，知能や学力として測定される知的な能力ばかりを過度に追い求める教育実践や政策への反省という意味が込められている。そして，予測不可能な世界において，子どもたちの人生においてより良い結果をもたらす能力（スキル，特性）を高め，子育てや教育の中でそれらを促進することが社会において有益な結果をもたらすという必要性が強調されている。この非認知能力という枠組みの中には，これまでに心理学で研究されてきた多くの概念が含められている。そして，これまでに蓄積されてきた諸研究，すなわち概念定義，測定手法の開発，測定された得点間の関連，長期縦断的な研究による社会的な結果の予測など，多くの研究知見も参照されている。非認知能力への注目は，心理学の研究知見を社会に応用する機会を提供する可能性がある一方で，心理学の研究における問題点も受け継がれる可能性がある。

これまでのさまざまな言説を踏まえると，非認知能力とは，知能や学力として測定されるもの以外であり（非認知性），何らかの形で測定可能であり（測定可能性），社会のなかで望ましいと

される何らかの結果を予測し（予測可能性），教育，介入，投資によって変容可能である（介入可能性），心理的な特徴のことを指す。学力や知能以外の概念は数多く研究の対象とされており，その精度については様々ではあるものの多くの心理的概念を測定する尺度が開発されている。そして，開発された尺度が長期にわたる縦断的な研究の中で用いられ，何らかの社会的結果の予測も検討されている。加えて，多くの概念において介入に関する検討も行われている。以上のように，多くの心理学的概念が，非認知性，測定可能性，予測可能性，介入可能性の定義を満たしている。このことを考慮すると，非認知能力に含められる概念はきわめて多く存在することが理解される。

測定可能性に関しては，非認知能力をどのような構造で捉えるかという問題にかかわる。非認知能力の中には多種多様な概念が含まれるのであるが，「非認知能力」とひとつの言葉で表現することによって，あたかもひとつの概念がそこに存在するかのような扱われ方をすることが多い。非認知能力をどのような構造で表現し，実際に応用する際にどのような取り回しを行っていくのかについては，十分な検討を必要とするだろう。

非認知能力に含められる概念がなぜ「よいもの」とされるのかについては，予測可能性の観点が大きい。主観的幸福感，学業成績，学歴，収入，心身の健康，そして寿命など，多くのアウトカムを縦断的に予測する検討の中で，非認知能力に含められる概念は価値のあるものとされる。そしてここで比較の対象となる概念は，知能である。多くの研究において知能とパーソナリティが比較され，勤勉性をはじめとするパーソナリティ特性が知能指数と匹敵する予測力を示すことが報告されていった。しかしここでいくつかの注意するべき点もある。たとえば，予測の範囲と予測の精度に関して，である。非認知能力に含められる多くの概念は，社会的なアウトカムに対して大きな予測力をもつわけではない。これは，帯域幅と忠実度のジレンマ（bandwidth-fidelity dilemma）という考え方に相当する。これはあらゆる通信には帯域幅（情報の広さ）と忠実度（情報の質）の二律背反性が含まれるという考えに基づいており，心理測定においては内容的妥当性と内的整合性との間のトレードオフとして取り上げられることも多い。この考え方は，何らかの心理的な特徴によって結果を予測する際にも生じる。すなわち，より狭い範囲を測定する概念は，より狭い範囲の結果を大きな効果量で予測することができるが，少し領域が異なると効果量は小さくなり，予測力が失われる。その一方で，より広い範囲を測定する概念はより広い範囲の結果を予測することができるが，影響力を示す効果量は小さなものとなる。非認知能力は広い範囲の社会的アウトカムを予測できると考えるからこそ価値があるとされる。しかしときに，非認知能力が強い予測力をもっているかのように論じられることがある点は注意が必要である。

介入可能性の問題に関しては，どの観点から，どの年齢段階に対して，どの程度の期間を想定した介入を行っていくかという観点が重要である。非認知能力の文脈では，より人生の初期において，より大規模な政策レベルの介入を行っていくことの効果が論じられることが多い。それに対して，心理学の個別の研究では，もっと成長した後で，より少人数を対象とした研究から介入の効果が記述されることが多い。また，ある介入で見出される効果は，決して大きなものとは言えない。ある介入の効果が決して大きいものではないという事実は，介入が行われる国や地域によって，また介入の対象となる人々が置かれた状況によって，その介入が成功するかどうか，また十分な効果を得ることができるのかどうかが変わってくることも示唆する。非認知能力の介入を論じる場合には，個人や小集団への介入すなわち先に述べた直接的投資を前提とするのか，あるいは自治体や国における環境的要因や政策手段を前提とするのかなど，どのような立場に立脚するのかを明確にする必要がある。

非認知能力の問題においては，何が望ましい状態であるのか，これからどのような方向へと進むべきであるのかという規範的な問いを避けることはできない。このような問いについて十分な議論を行う場合には，心理学以外の学問分野との学際的な連携が不可欠である。非認知能力の問題を模索する中で，心理学が進むべき方向性を探ることが重要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 小塩真司	４．巻 547
２．論文標題 よりよく生きるために性格を考えてみる	５．発行年 2021年
３．雑誌名 TASC MONTHLY	６．最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小塩 真司	４．巻 25
２．論文標題 野外教育研究への示唆 心理尺度構成法の観点から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 野外教育研究	６．最初と最後の頁 167～177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11317/joej.2022_0013	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小塩真司・岡田　涼	４．巻 92
２．論文標題 パーソナリティ特性と社会指標の関連―時系列分析による検討―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 心理学研究	６．最初と最後の頁 127-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.92.20310	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小塩真司	４．巻 62
２．論文標題 「非認知能力」の諸問題 ―測定・予測・介入の観点から―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育心理学年報	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 OSHIO, Atsushi
2．発表標題 Age-related differences of Big Five personality traits remain even during the COVID-19 pandemic in Japan.
3．学会等名 the 7th Biennial Conference of Association for Research in Personality（国際学会）
4．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

1．著者名 小塩 真司ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 320
3．書名 非認知能力	

1．著者名 小塩真司、平野真理、上野雄己	4．発行年 2021年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 148
3．書名 レジリエンスの心理学	

1．著者名 杉山 憲司、杉山 憲司、小塩 真司、小塩 真司	4．発行年 2021年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 240
3．書名 パーソナリティ・知能	

１．著者名 小塩 真司	４．発行年 2020年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 256
３．書名 性格とは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Personality Psychology Laboratory
https://www.f.waseda.jp/oshio.at/index.html
早稲田大学パーソナリティ心理学研究室
http://www.f.waseda.jp/oshio.at/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関